

## プロローグ

椰子<sup>やし</sup>の木。わたしは椰子の木を思い浮かべていた。

言っておくと、それはハワイやバリなどの旅先で目にする椰子の木ではない。

\*

ハンガリー出身の写真作家の展示会で、そこに並ぶ写真の空気感にちっともふさわしくない椰子の木が浮かんだのは、観覧客のなかにウジエに似た後ろ姿を見つけたからだ。ウジエとわたしは十年前、ある文学サークルで初めて顔を合わせた。その小さなサークル内でウジエは数少ない同期のひとりで、二十歳そこそこのわたしをときめかせもすれば、やきもきさせもした。そればかりか、一緒にいるときそんな気持ちになるのが自分だけではないことを、当時のわたしはうっすらと感じていた。桜が咲きほころだれもないキャンパスや、風に心乱れる漢江<sup>ハンガング</sup>の土手を、火照った顔で一緒に歩いた夜があったから。でも、何度かの偶然とすれ違いの結果、わたしたちが

恋人同士になることはなく、めいめいが恋愛をしているあいだはしばらく遠のき、どちらかの恋愛が終わるとまた少しお互いを気にするといった関係に移り変わっていった。

わたしの記憶が確かなら、ウジエは大学二年の冬休みに入隊した。ときどき送られてきていた手紙。黒い罫線が引かれただけの地味な便箋に整った字で綴られていたのがどんな内容だったかはもう憶えていない。ウジエから頻繁に手紙が届いていたその時期、わたしはアルバイト先で出会った、近くの大学の男の子と味気ない恋愛を始めたばかりで、ウジエは入隊の少し前から付き合いはじめた年上の恋人にふられたあとだった。その人がウジエの私物を返したがっていて、実家を送られるのはいやだと言うから、小包をわたしの家に届けさせたことを憶えている。宅配便の小包に入っていたのは、キム・グアンソクとイ・ムンセのカセットテープ——CDでもなく、カセットテープ！——と、一九二〇年代から一九三〇年代にかけてフランスやアメリカで活動していた写真家たちの写真集など。わたしはそれらをウジエに返したんだろうか？ よくわからない。わたしたちがいつからお互いの近況を知らないままにいるようになったのか、はつきり思いつけないように。ウジエの入隊以降、お互いの大学生活にずれが生じたことも、わたしたちの関係が遠ざかった理由のひとつだったろう。ウジエが復学したときはわたしが休学中で、わたしが復学したとき、ウジエは図書館にこもって専攻分野の勉強に熱中しているという具合だった。

大学卒業とともにますます疎遠になっていたウジエに、サークルの先輩や後輩の結婚式で再会することも間々あった。結婚する気もないのに他人の結婚式に出るのがいやでぐずぐずするうち、息を弾ませながら遅れて式場に入ると、同じように遅れて来たのか、席に着けないまま出入口の

そばに立っているウジェを見かけたりした。ウジェはウジェで、アイラインにマスカラまで塗ったわたしの姿が目新しかったはずだが、ぱりっとしたスーツ姿のウジェといったらまるで別人のようで、ああ、自分も歳をとっているのだと実感させられた。

でも、そんなふうに知人の結婚式でちらちら顔を合わせていたのも、ずいぶん前の話だ。三十までは招待状をもらえばスケジュールを空けていたものだが、いつからか祝儀を送るだけになっていった。親しい人でそれらしい人はすでに結婚していたし、そもそもわたしは人間関係が狭いほうだった。そういうわけで、ソウルのと真ん中で開かれていた写真展でウジェと遭遇する可能性については少しも想像していなかった。ソウルは広く、一千万人が暮らす都市だから。一点、アンドレ・ケルテスを最初に教えてくれたのはウジェだったということがあるけれど。

ウジェを見つけたのは二月半ばのある金曜日、閉館時間も迫っていたときだった。会社を辞めて以来、これといつてすることもなかったわたしは、朝食兼昼食を食べてから出勤でもするよう展示館に足を運び、閉館時間まで同じ写真を観賞するという生活をかれこれひと月ほども続けていた。写真が好きなこともあったけれど、展示館を訪れるのにはもうひとつ理由があった。展示会場ではだれとも社交的な会話を交わす必要がなく、わたしに視線を向ける人も皆無だったから。そういうわけで、ウジェの後ろ姿を発見したとき、嬉しいと思う一方で、声をかけるかどうかわずにはいられなかった。もう遅い時間で、会場に人はほとんどおらず、どう見てもウジェと思われる男がひとり、壁に書かれた作家の文章を読んでいた。

わたしは光で言葉を綴る。なにかが起きるのを待ったり探したりせず、ただ見ている。わたしは記録しているのではない。解釈を与えているだけだ。

わたしはウジェの背中をしばらく見つめてから、踵を返して外へ出た。

展示会場の入口には、アンドレ・ケルテスの連作『エリザベスと私』の一枚からなるポスターが貼られていた。右半分だけの女性と、その肩に置かれた男性の手を撮った白黒写真。それは作家が久しく撮りつづけてきた妻と自身の写真のひとつで、エリザベスへの深い愛情がにじむその連作を見るたび、わたしはなんともいえない寂しさに包まれるのだった。みぞれが降っていたせいでろうか？ その日に限っていつも以上に物寂しい気持ちになり、侘しさすら募ってくるようだった。出口の前でマフラーを結び、鞆から傘を出した。

「あれ、ヘミじゃないか？」

傘がぱつと開いた瞬間、背後からわたしを呼ぶ声が聞こえた。振り向くと、そこにはグレーのコートを着たウジェが立っていた。

「ほんとに久しぶり」

「そうだね」

コーヒーでも飲んでく？ というウジェの誘いに近くのカフェに入った方がいいが、いざ差し向かいに座ってみると、気まずさから何度も会話が途切れた。静寂の合間に「マイ・ファニー・ヴ

アレンタイン」がしつとりと流れる。こんなところで会うなんて。相変わずケルテスが好きなだね。最後に会ったのはSの結婚式だっけ？ 落ち着かなくて言葉並べようちに、「あ、結婚は？ お祝いできなくてごめん、なにも聞いてなくて」と言うと、ウジェが首を振った。

「してない」

「あ、そうなんだ」

「彼女もいないし……そっちは？」

さりげない口調でそう訊きながら、ウジェはコーヒーカーップの持ち手を親指でこすっていた。

「わたしも」

「なんだ、お互い寂しい人生だなあ」

ウジェの言葉に笑いがこぼれ、すると空気も少し和やかになった。

「いやいや、希望を捨てちゃいけないな。おれたちも遠からず、エリザベスみたいな存在を見つ  
けられるよ」

おのずと展示会の話に触れながら、ウジェがおどけた調子で続けた。言われてみれば、どちらともが独り者の状態で会ったのは二十歳以降初めてのことだ。ウジェはそのことに気づいているだろうか？ わたしの知るウジェの最後の恋人は、中学校の先生をしていた。ふと、どうしてウジェのようなやさしい人と別れるのだろうか？ と不思議に思った。もつとも、実際に恋愛してみれば別れたくなる理由はごまんと出てくる。人生は美しいだけではないのだ。わたしにしたって、すべてが望みどおりに運んでいたら、平日の展示会場を毎日のようにぶらぶら訪れることもなかっ

たはずだ。

「でも、エリザベスのほうがケルテスより早く死んじゃったでしょ。せつかく大切な人を見つけたのに、そんなふうに失うって、すごく怖い」

わたしはこちらを見つめる、年月のせいで頬のほっそりしたウジェの視線を避けるように、窓のほうへ顔を向けた。みぞれはいつしか雨になっていた。雨粒がひびをつくる窓ガラスの上に、忘れていた部屋の風景が浮かんできた。

記者になってからは忙しくて大学時代を思い出す暇もなかったが、それでもごくたまに、サークルでの日々を懐かしく思うことはあった。正しくは、あの部室を。狭苦しい部室に座っていると、雨の日にはボタボタと大きな音が響いた。入学したてのころ、文学に少しも興味のなかったわたしがその部屋の扉をくぐった本当の理由は、文学サークルであれば世間ずれしていない引つ込み思案な人たちが集まっているのではないかという偏見のためだ。社会学科の先輩たちは毎日のようにお酒を無理強いし、この二十一世紀に二十世紀のごとく学生運動家のパフォーマンスを教えこんだ。そんな無骨さにげんなりしていたわたしには、空きコマの時間に身を隠せる学科外の空間が必要で、そんなとき見つけたのが、コピー室の壁に貼られた文学サークル新規生募集の公告だった。

サークルのメンバー全員が、わたしの偏見どおりに静かでおとなしかったわけでは当然ない。リビドーは精神活動のエナジー云々とふだんは酒と女に溺れて暮らし、疲れたころになって放蕩息子のように部屋に舞い戻ってくる先輩や、近代文学の終焉という言葉を盾に小説や詩などは書

かず、厭世主義を押しつける先輩もいた。そこにいた面々はわたしの抱いていたイメージとはほど遠かったけれど、サークルをやめることはなかった。なぜなら、当時すでに文学サークルは存続できるかどうかの瀬戸際で、本来の役割を失った部室というのは、ひとりでごはんを食べたりポロポロのソファで昼寝したりするのにうつつけの場所だったから。がらんとした部室でチャンポンの出前をとって食べていると、のっそり入ってきただれかが石焼ビビンバの出前をとり、そうやってめいめいの席でめいめいのスピードで、会話をするとかなにかしなればならないというプレッシャーもなしに、ひらすら自分のごはんに集中していればいい空間、シダ植物のようにひっそりと集まって佇んでいられるその空間が、アルバイトのかけもちとチーム形式の課題に疲れていたわたしにはこのうえなくありがたかった。

「先輩たちに文集用の作品を出せって言われるたびに逃げ回ってたおまえが、いまや書き物で食ってる数少ないサークル出身者になってんだから、人生って皮肉なものだよな」

ウジェがそう言ったのは、気まずさも少しほぐれて思い出話に花を咲かせていたときだった。

「なにも書かなかったのは、お互いさまでしょ」

そうは言っても、ウジェがなにも書かなかったというのは正しい表現じゃない。ウジェは写真を撮りに出掛けては、それを短い旅日記と一緒にブログに載せていた。内容は思いのほかスタイリッシュで感受性にあふれ、閲覧者も少なくなかった。でも、ウジェもまた、先輩たちの意になう詩や小説を書くことはなかった。年に二回、定期発行している文集をつくる時期になるとふ

たりして立たされ、先輩たちからさんざん叱られていたことを思い出し、わたしたちは顔を合  
わせて笑った。でも、そんな矢先にウジエが、「おれなんか薬学やって薬剤師になってんだから、  
つまらない人生だよな。それにくらべてヘミはかっこいいよ。文章で世の中を変える仕事だもん  
な」と言い、それ以上笑えなくなった。わたしが新聞社に就職したのは、書くことへの信念だと  
か意志とは無関係だったから。おまけに、記者生活がいやになってひと月前に退社していた。

「かっこよさで言ったら薬剤師のほうが上じゃない。どこで働いてるの？ サブリでも買いに行  
こうかな」

そう質問したのは、純粹に会話の流れを変えたい気持ちからだ。ところが、そう訊かれた  
ウジエは目をきらめかせながら、背中を椅子の背もたれから離した。

「じつはおれ、来月頭チエジユドに濟州島に帰って、薬局を開くん」

「わ、ほんとに帰るんだ」

嬉しい知らせに感じられたのは、ウジエが昔から、四十になる前にふるさとの濟州島に帰って  
暮らしたいと言っていたのを思い出したからだ。ソウルはなにもかも騒がしい、光さえもうるさ  
い、そんなことを言っていた気がする。

そしてウジエが濟州島に帰ると聞くや、かつてサークルのみんなと、ウジエの実家で合宿なら  
ぬ合宿をした一年生の冬休みを思い出し、忘れていたある感情がよみがえった。大学生が合宿で  
よく行く大成里テソンリや加平カヒョソに飽き飽きしていた先輩たちが、ウジエが濟州島の出身だと知り有無を言  
わせず合宿先に決めてしまったあの冬、わたしは人生初の濟州島で、ソウルは光さえもうるさい

と言っていたウジエの言葉が初めてわかる気がした。

「お母さんは元気?」

「もち」

「あの家もあのまま?」

「うん、でもおふくろは、孫の世話でソウルに来ててさ。それでおれが、家の管理も兼ねて帰ることになったわけ」

「そうなんだ」

低い石垣に囲まれた平屋。赤い三角屋根。石垣をはみ出して枝を垂らしていたみかんの木。ウジエの両親——当時はまだお父さんも生きてらした——はとつくに寝室に引っこみ、パーカーを羽織って庭のテントで遊んでいた先輩たちも飲みつぶれた隙を見て、ウジエとふたり、海のほうへ散歩に出たあの夜をウジエも憶えているのかもしれないと思うと、少し気恥ずかしくなった。ウジエに片想いしているような、これが恋というものかという気がして、ほろ酔いのなかひとり胸が苦しくなったあの夜。

「あのとき、海辺で椰子の木の話をしてくれたの、憶えてないよね?」

なにげなさを装ってハイトーンで訊くと、ウジエは「椰子の木? 濟州島の街中に立ってる椰子の木は、わざわざ輸入したものだって話?」と訊き返した。

「そう」

「憶えてるよ。その話をしたら、おまえが伯母さんの話をしてくれたのも」

「わたしが、伯母さんの話を？」

伯母さんの話を人前ですることはほとんどなかったから、わたしは驚いた。

「うん。おまえあのとき、先輩たちからの無理強いじゃなくて、いつかそんな気になって本当になかを書き日が来たら、伯母さんの話を書きたいって言ってる。伯母さん？ いや、伯母さんたち、だったかな、まあとにかく」

ウジエはわたしの記憶にない話をしていった。

「なのに、卒業まで結局なにも書かないから、内心どんな話なのか気になってた」

本当に、わたしがそんな話をしてた？ 伯母さんについてどんな話をしたのか、思い当たる節はまったくなかった。どんな話か気になってた。ウジエはそう言うから、答えを待つかのようには、薄い微笑を浮かべてじつとこちらを見つめていた。短い沈黙が流れるあいだ、忘れていたなにか、たとえば、長らく放つたらかして厚い埃をかぶった本のページが、そつと開いていくような気がした。あいだに一枚の写真が挟まれた本。目を閉じると、いまにもその写真が見えそうだった。オレンジ色のセーターを着て、ソファの背もたれに右腕をかけて座り、左を見つめて笑っている女性の写真。前髪の揃ったポブヘアに、金縁の眼鏡、はにかみながらも、小ぶりな目だけははいたずらっ子のように輝いている東アジア系の女性。四十代半ばの、わたしの伯母さん。